NEW JAPAN PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン

6
June, 2025

7
July, 2025

2025/2026 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団6, 7月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #664　石川亮子　1
すみだクラシックへの扉 #32　小室敬幸　7
楽員ストーリーズ ㊾　竹田 勉（コントラバス）　13
NJP from Inside　14
NJP 9月公演　柴田克彦の鑑賞ポイント　17
2025 / 2026シーズン　定期演奏会プログラム　18
お客様からの声　23
室内楽シリーズ　25
「パトロネージュ・システム」のご案内　30

■特別支援企業
オリックス
in 鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体
公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉
演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント！
QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。
@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。
https://www.njp.or.jp/qs
いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season
#664

6.28［土］ サントリーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第664回定期演奏会
2025年6月28日（土）14時00分
サントリーホール

6.29［日］ トリフォニーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第664回定期演奏会
2025年6月29日（日）14時00分
すみだトリフォニーホール

◉ストラヴィンスキー（1882－1971）
ピアノと管弦楽のためのカプリッチョ＊　約20分
Igor Stravinsky: Capriccio for Piano and Orchestra (revised version 1949) ＊

Ⅰ. Presto
Ⅱ. Andante rapsodico
Ⅲ. Allegro capriccioso ma tempo giusto

―― 休憩20分 ――

◉ショスタコーヴィチ（1906－75）
交響曲第11番 ト短調 op.103「1905年」　約65分
Dmitry Shostakovich: Symphony No.11 in G minor, op.103, “The Year 1905”

Ⅰ. 宮殿前広場　Palace Square: Adagio
Ⅱ. 1月9日　Ninth of January: Allegro
Ⅲ. 永遠の記憶　Eternal Memory: Adagio
Ⅳ. 警鐘　Tocsin: Allegro non troppo

［指揮］アンドレイ・ボレイコ
Andrzej Boreyko, Conductor

［ピアノ］ツォトネ・ゼジニゼ＊
Tsotne Zedginidze, Piano ＊

［コンサートマスター］崔(チェ)文洙、伝田正秀
Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

［アシスタント・コンサートマスター］立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

演奏会アンケートは
こちらから
https://www.njp.or.jp/qs

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）［6/29公演］
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人 日本芸術文化振興会
■後援：在日ジョージア大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

文化庁

Profile

©Michał Zagórny

アンドレイ・ボレイコ［指揮］ Andrzej Boreyko, Conductor

アンドレイ・ボレイコは2023/24シーズンまでワルシャワ・フィルの音楽・芸術監督を務め、実りある5年の任期を終えた。ワルシャワ・フィルとともにヨーロッパ、日本、韓国そしてアメリカ・ツアーを行い、ペンデレツキ音楽祭、ベートーヴェン復活祭音楽祭、ショパン・アンド・ヒズ・ヨーロッパ・フェスティバルに出演した。
24/25シーズンのハイライトにはウィーン響、アントワープ響、アルハス響、ハンブルク・フィルハーモニー州立管、ポーランド国立放送響、シュトゥットガルト・フィル、バンクーバー響などへの客演がある。
これまでにボレイコは、ロンドン・フィル、ウィーン放送響、ベルリン放送響、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管、プラハ響、ストラスブール・フィル、ザルツブルク・モーツァルテウム管、マドリードのRTVE放送響、RAI国立響、モントリオール響、クリーヴランド管、ソウル・フィル、シドニー、シアトル、サンフランシスコ、ダラス、そしてヒューストン響に客演。また、ミラノ・スカラ座フィル、ロシア国立アカデミー響、シンフォニア・ヴァルソヴィアなどと欧州ツアーを行っている。
その他、これまでに、イエナ・フィル、ハンブルク響、ベルン響、デュッセルドルフ響、ウィニペグ響、ベルギー国立管、ネイプルズ・フィルの音楽監督、ミラノ響の常任指揮者を歴任している。

©Sophia Melkidze

ツォトネ・ゼジニゼ［ピアノ］ Tsotne Zedginidze, Piano

音楽一家に生まれたゼジニゼは、ジョージアの偉大な作曲家ニコ・スルハニシヴィリと、有名な教授アナスターシャ・ヴィルサラーゼの子孫である。5歳でピアノを習い始め、祖母であり教授のニノ・マムラッツェに師事した。
6歳から作曲を始め、20世紀、21世紀の音楽への関心を高めて、現在16歳という若さですでに圧倒的な音楽性を持つユニークな才能を発揮している。バレンボイム、ヴィトマン、カンチェリなど偉大な音楽家たちは、今世紀で最も優れた才能を持つ音楽家のひとりとしてその名を挙げている。
24/25年シーズンは、サー・サイモン・ラトル指揮バイエルン放送交響楽団のアカデミーと再共演。リサイタルでは、ルツェルン音楽祭、チューリッヒ・トーンハレ、ベルリン・コンツェルトハウスで行われ、エルマウ城ではヴェルビエ音楽祭の友人たちと室内楽を演奏する。
作曲家としては、共同委嘱しているカメラータ・ザルツブルク、スコットランドとスウェーデン室内管弦楽団が、2025年1月、彼の新しい交響曲を初演した。
2025年のピアニストとしてのハイライトは、ベヒシュタインの招きによるベルリン・コンツェルトハウスでのリサイタル、アンドレイ・ボレイコ指揮シュトゥットガルト・フィルとのチャイコフスキー・ピアノ協奏曲ツアー、日本、ソウル、台北でのリサイタル・ツアーである。

Program Notes ◉石川亮子［音楽学］

美しい水の都サンクトペテルブルク。「ロシアの心臓」モスクワに対して、「ロシアの頭」サンクトペテルブルクは芸術・文化の中心地であり、アレクサンドル・ネフスキー大修道院の墓地には、文豪ドストエフスキーやチャイコフスキーが眠っている。1882年生まれのストラヴィンスキーは、ペテルブルク音楽院教授であったリムスキー=コルサコフに作曲を師事。一方、1906年生まれのショスタコーヴィチは、グラズノフが院長を務めるペトログラード音楽院に入学し、レニングラード音楽院作曲科を卒業した。言うまでもなく、これら音楽院は同じものであり、ロシア革命を経てソヴィエト連邦が存在した、その歴史を物語っている。今年、没後50年を迎えるショスタコーヴィチ。もしも生まれた年が四半世紀早かったなら、そして生きた国や情勢が違っていたなら、その人生と音楽はどのようになっていたのだろうか――。

■ ストラヴィンスキー: ピアノと管弦楽のためのカプリッチョ

新古典主義、フランス時代の作品 ►

1882年6月17日（ロシア暦で5日）、帝国ロシアの首都ペテルブルク近郊のオラニエンバウム（現ロモノソフ）生まれ。イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882~1971）の作風は「カメレオン作曲家」と呼ばれるにふさわしく、印象主義、原始主義（いわゆる3大バレエ『火の鳥』『ペトルーシュカ』『春の祭典』が属する）、新古典主義と変遷していき、1950年代に入ると十二音技法による作品も書かれた。「カプリッチョ」は1928~29年に作曲された、ストラヴィンスキーの新古典主義時代の特徴をよく示す作品のひとつである。

カプリッチョに込めた意味 ►

第一次世界大戦後、スイスからフランスに居を移したストラヴィンスキーは、ピアニストとしてもしばしばステージに登場するようになる。そのための自作自演のレパートリーとなったのが2つのピアノ協奏曲、すなわち「ピアノと管楽器のための協奏曲」と「ピアノと管弦楽のためのカプリッチョ」であった。ストラヴィンスキーの『自伝』によれば、カプリッチョはファンタジア（幻想曲）に近く、「次々と浮かぶ様々な種類のエピソードを並置することによって」作られた音楽であり、作曲中に念頭に置かれていたのは、ウェーバーのように「芸術の崇高さ」ではなく「優雅さと気品」、そして演奏する際の「真の喜び」を備えた音楽であった。

曲の構成 ►

確かに、「カプリッチョ」は自由で気まぐれな性格を持っているものの、3つの楽章の基調となるのがト短調、ヘ短調、ト長調と、終楽章が輝かしく際立つように計算されているのは見逃せないだろう。また「協奏曲」と比べるとオーソドックスな編成によるが、ヴァイオリンはⅠとⅡに分かれず弦4部で、さらにバロック時代のコンチェルト・グロッソ（合奏協奏曲）を模した、「コンチェ

ルティーノ（独奏楽器群）」と「リピエーノ（合奏楽器群）」に分割されている。曲は慣例に従った急・緩・急の3楽章からなり、アタッカで続けて演奏される。

各楽章の特徴 ▶

第1楽章は序・A・B・A・コーダの構成による。とりわけ中間のB部分では、諧謔的であったり感傷的であったり、様々な性格のエピソードがめまぐるしく入れ替わる。

第2楽章はハンガリーのツィンバロムを思わせる、独奏ピアノのラプソディックなパッセージが印象的。

第3楽章は最初に作曲された楽章であり、楽章表記にある「カプリッチョーソ」がそのまま作品全体のタイトルとなった。ロンド形式により、カプリシャスなロンド主題の間に、表情の異なる複数のエピソードがはさまれる。

なお、本日は1929年のオリジナル版にあった細かなミス等が修正された、1949年改訂版での演奏となる。

［楽器編成］ピアノ独奏、フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3（Es管クラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽4部。

■ ショスタコーヴィチ：交響曲第11番 ト短調 op. 103「1905年」

政治に翻弄され続け ▶

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906~75）が生涯に15曲の交響曲を書いた、20世紀最大のシンフォニストのひとりであることに異論はないだろう。同時にその音楽が一筋縄では行かないのは、ショスタコーヴィチの活動がソヴィエト連邦という国家のもとで行われたからに他ならない。レニングラード音楽院の卒業作品として書かれた交響曲第1番で、1926年5月12日デビュー。新生ソ連に華々しく登場した作曲家の人生は、しかしその後ソヴィエト共産党からの変転する評価に翻弄され続けることになる。

血の日曜日事件をテーマに ▶

1905年1月22日（ロシア暦で9日）、帝国ロシア・ペテルブルク。ツァーリ（皇帝）に「プラウダ（正義）」の実現を請願するために宮殿に向かった市民に軍隊が発砲し、1000人以上が射殺された──。第11番「1905年」は1957年夏に、ロシア革命の発端となった「血の日曜日」事件を描く標題付き交響曲として作曲された。同年10月30日、革命40周年を祝うモスクワで、ラフリン指揮のソヴィエト国立交響楽団によって初演。この曲で翌年レーニン賞を受賞したショスタコーヴィチは、今度こそソ連の作曲家としての地位を上り詰めていくことになった。

作曲家のことば ▶

1953年にスターリンが死去。いわゆる「雪解け」のなかで、革命を標題とする交響曲を書き成功を手にしたショスタコーヴィチを、再び体制に迎合したとみるべきなのだろうか。奇しくも第11番に取りかかる直前、1956年10月23日にハンガリー動乱が勃発。自由化を求めるハンガリー市民の蜂起は、ソ連軍の介入によって鎮圧された。ちなみにショスタコーヴィチは『証言』（作曲家の死後、1979年出版）のなかで、「わたしの交響曲の大多数は墓碑である」と語り、第11番について「かずかずの悪業に耐えられず、支配者への信頼を失った国民についての曲である」と言っている。

曲の構成と各楽章の特徴 ▶

曲は切れ目なく演奏される、緩・急・緩・急の4楽章からなる。各楽章には標題が付けられ、ショスタコーヴィチのなかで最もR. シュトラウス的な交響曲と評される一方で、作曲者自身はムソルグスキーとの様式的接点を意識していたようである。曲中には6つの革命歌が盛り込まれ、民謡的あるいはロシア聖歌風の旋律が多用されており、それを裏付けていると言えよう。

第1楽章「宮殿前広場」は全曲の序奏となる、真冬を思わせる冷たい緊張感に満ちた音楽。途中、フルートによって提示される「聞け」に続いて、もうひとつの革命歌「夜は暗い」が低弦に出る。

第2楽章「1月9日」は交響曲全体の中心となる楽章で、自作の無伴奏混声合唱曲「革命詩人の詩による10の詩曲」op. 88の第6曲「1月9日」から2つの旋律、「おお、皇帝われらの父よ」と「帽子をとろう」が用いられ、絡み合い大きくうねるように進む。それらが静まると、第1楽章冒頭の音楽の回帰。そして宮殿に到着した市民に向けて、一斉射撃が開始される──。チェレスタと弱音器付きの弦楽器のトレモロが死の静寂を映し出す。

第3楽章「永遠の記憶」は葬送行進曲と言うべき音楽で、まず革命歌「同志は倒れぬ」が弱音器付きのヴィオラによって歌われる。「永遠の記憶」とは、ロシア正教会における死者への祈りの言葉。中間部では革命歌「こんにちは、自由よ」が高らかに歌い上げられるが、「帽子をとろう」がそれを押しとどめ、葬送行進曲の再現へと続く。

第4楽章「警鐘」は「圧政者らよ、激怒せよ」で始まり、2つ目の革命歌「ワルシャワ労働歌」が現われる。スヴィリードフのオペレッタ『ともしび』から「雷鳴の夜はなぜつらい」も登場し、ついにユニゾンの「おお、皇帝われらの父よ」によってクライマックスが築かれる。またもや第1楽章冒頭の音楽が回帰し、イングリッシュ・ホルンが「帽子をとろう」をしみじみと歌う。最後は渦巻くエネルギーとともに鐘が打ち鳴らされ、革命の継続を宣言して曲を閉じる。

［楽器編成］フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タムタム、シロフォン、チューブラーベル、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部。

ORIX オリックスグループ

SUMIDA TOBIRA of classic 2025-2026 Season #32

7.4[金] 5[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会すみだクラシックへの扉 第32回
2025年7月4日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
7月5日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

◉ショパン (1810–49)

ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 op.11 ＊

約40分

Frédéric François Chopin: Piano Concerto in E minor, op.11 ＊

Ⅰ. Allegro maestoso
Ⅱ. Romance: Larghetto
Ⅲ. Rondo: Vivace

―― 休憩20分 ――

◉ドヴォルジャーク (1841–1904)

交響曲第9番 ホ短調 op.95「新世界より」

約45分

Antonín Dvořák: Symphony No.9 in E minor, op.95, "From the New World"

Ⅰ. Adagio – Allegro molto
Ⅱ. Largo
Ⅲ. Scherzo: Molto vivace
Ⅳ. Allegro con fuoco

[指揮] 熊倉 優
Masaru Kumakura, Conductor

[ピアノ] 小林愛実 ＊
Aimi Kobayashi, Piano ＊

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
■後援：チェコ共和国大使館
チェコセンター東京
ポーランド広報文化センター

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
https://www.njp.or.jp/qs

文化庁
チェコ共和国大使館
チェコセンター東京
ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

Profile

熊倉 優［指揮］ Masaru Kumakura, Conductor

1992年東京生まれ。16歳で作曲を始め、大学入学時より指揮を学ぶ。桐朋学園大学（作曲専攻）卒業後、同研究科修了。指揮を梅田俊明、下野竜也に師事。第18回東京国際音楽コンクール<指揮>で第3位受賞。2016年から2019年までNHK交響楽団の首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィ、および同団のアシスタントを務め、定期公演などに携わる。2020年、新型コロナの影響による活動休止後に再開された「希望のコンサート」で指揮し注目を集める。2021年よりドイツを拠点とし、ハンブルク州立歌劇場でケント・ナガノのアシスタントを務める傍ら、『魔笛』などを指揮。2023年8月からハノーファー州立歌劇場第2カペルマイスターに就任、24/25シーズンはフィリップ・グラスの『サティヤーグラハ』、バレエ『ペール・ギュント』の2つのプレミエの他、『ヘンゼルとグレーテル』、『リゴレット』その他コンサート等含め40公演以上を指揮する。
https://www.masarukumakura.com/

©HOSOO CO., LTD.

小林愛実［ピアノ］ Aimi Kobayashi, Piano

2021年10月「第18回ショパン国際ピアノコンクール」第4位入賞。
1995年山口県宇部市出身。3歳からピアノを始め、7歳でオーケストラと共演、9歳で国際デビューを果たす。
これまでに、スピヴァコフ指揮モスクワ・ヴィルトゥオーゾ、ブリュッヘン指揮18世紀オーケストラ、ジャッド指揮ブラジル交響楽団、ポスカ指揮チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団など国内外における多数のオーケストラと共演。
2010年14歳でEMI ClassicsよりCDデビュー。サントリーホールで日本人最年少となる発売記念リサイタルを開催した。
翌2011年にはセカンドアルバム『熱情』をリリース。
2015年10月、第17回ショパン国際ピアノコンクール ファイナリストとなった。
2018年4月、ワーナークラシックスよりCD『ニュー・ステージ～リスト&ショパンを弾く』をリリース。同年8月には、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭に出演し好評を得た。
2021年8月 ワーナークラシックスより最新CD『ショパン：前奏曲集 他』をリリース。
フィラデルフィア・カーティス音楽院で、マンチェ・リュウ教授のもと研鑽を積んだ。
2022年3月、第31回出光音楽賞受賞。

Program Notes ◉小室敬幸［音楽ライター］

東欧（東ヨーロッパ）という言葉には2つのニュアンスがある。ひとつは字義通り、ヨーロッパ全体のなかで東に位置しているという意味。もうひとつは冷戦時代の東側諸国（Eastern Bloc）――つまりソ連の影響下にある社会主義国家という意味だ。日本ではいまだに後者の意味で東欧という言葉を用いることが多いようで、実際に本日の演奏会も「東欧プログラム」に位置づけられている。だが知っていてほしい。ショパンの故郷ポーランドも、ドヴォルジャークの故郷チェコも現在、地理区分は中欧（中央ヨーロッパ）だと自認していることを……。ただし、国連の地域グループのように中央という分類がなく、ヨーロッパを西か東かで分ける場合は東ヨーロッパグループに属することとなる。

■ ショパン：ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 op.11

作曲家が生まれた時代のポーランド ▶

「ポーランド共和国」はかつてリトアニアと連邦を組んでおり、「ポーランド王国およびリトアニア大公国」（1569～1795）というヨーロッパ最大の国であった時代がある。ところが3度にわたる分割によって連邦は消滅。1795年までに、ポーランドの大部分はハプスブルク帝国（オーストリア）とプロイセン王国に編入されてしまった。その後、1807年にフランス人ナポレオンの手によってプロイセンから独立したのが「ワルシャワ公国」で、この地でフランス人の父とポーランド人の母のあいだに生まれたのがフレデリック・ショパン（1810～49）である。

ナポレオンが失脚すると1815年のウィーン会議によってオーストリア、プロイセン、ロシアによって再びポーランドは分割されてしまう。ワルシャワ公国の大部分は、ロシア皇帝アレクサンドル1世が国王を務める「ポーランド立憲王国」となったが、1825年にアレクサンドル1世が死去。跡を継いだ弟のニコライ1世はロシアでの内乱を受けて、徐々に帝国内だけでなく衛星国にも圧政を敷いていく。

ウィーンからパリへ ▶

ポーランド立憲王国ではロシアに対抗して、1830年に11月蜂起（英語では“士官候補生たちの革命”と呼ばれる）が発生し、1831年10月にポーランド軍が降伏するまで戦争が続いた。降伏の前月、ワルシャワが占領されたとシュトゥットガルト（当時はドイツ連邦に属する「ヴュルテンベルク王国」の首都）で知ったショパンが作曲したと言われているのが「革命のエチュード」こと12の練習曲集 op.10の第12番 ハ短調である。それにしても何故この時、ショパンはシュトゥットガルトにいたのか？ それはウィーンに見切りをつけてパリへと向かっていた道中だったからだ。一旦、2年前に遡ろう。

1829年にワルシャワ音楽院を首席で卒業した19歳のショパンは、卒業旅行として友人たちとウィーンを訪れた。2回行われた演奏会では、意外かもしれないが民族的な要素に聴衆は熱狂したという。帰国するとウィーンでの成功がポーランドでも広まっており、ワルシャワでも1830年3月に演奏会が開かれた。そこで初演されたのが（第1番より先に作曲された）ピアノ協奏曲第2番 ヘ短調（1829～30）である。

旅立ちの公演で初演 ▶ 政情が落ち着かないため、なかなか叶わなかったのだが10月にウィーン再訪を決意。10月11日にポーランドへの別れを告げる演奏会で初演され、大成功を収めたのがこのピアノ協奏曲第1番 ホ短調であった。ウィーンでも演奏されたようだが反響は得られず。他にも複数の失望が重なり、ショパンはパリに向かうことにし、その道中でシュトゥットガルトを通ったのだ。なおパリでは、この協奏曲が絶賛されている。

各楽章の特徴 ▶ **第1楽章**は、これから世界へと羽ばたかんとする当時20歳ほどの青年ショパンの心情を反映したのであろう、自意識の強さゆえの不安と希望が溢れんばかりにつまった音楽である。形式は、協奏ソナタ形式。

第2楽章は「ロマンス」と題されているように、甘美な恋愛を思わせる音楽。当時のショパンはコンスタンツヤ・グワトコフスカとほぼ両思いのような状態（ただし、それが分かる彼女の手紙が贈られたのは初演後）にあったが、このままポーランドに留まっているわけにもいかない。そんな逡巡が込められているかのようだ。形式は、自由なソナタ形式。

第3楽章は「ロンド」と題されているが、ロンド形式というよりもソナタ形式に近い。ウィーンで民族的な要素が人気を博したため、ポーランドの舞曲クラコヴィアク（旋律に登場するシンコペーションが特徴）を取り入れたのだろう。ポーランド国外でより大きな成功を願った、ショパン自身の希望的観測が込められている音楽だ。

［楽器編成］ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部。

■ ドヴォルジャーク：交響曲第9番 ホ短調 op. 95 「新世界より」

ボヘミア王国における チェコ語 ▶ 現在の「チェコ共和国」の前身となったのが「チェコスロバキア」（1918～92）であったことをご記憶の方も多いだろう。そのひとつ前は、第一次世界大戦が終戦するまで「ボヘミア王国」（1198～1918）であった。非常に長く続いた王国だが、15世紀後半からハプスブルク家の支配下にあり、なんと17世紀半ばからはチェコ語が禁止されてしまう。

18世紀末になるとフランス革命（1789～99）などの影響から、少しずつチェコ独自の文化を取り戻そうという機運が生まれていくのだが、交響詩「モルダウ」で有名なベドジフ・スメタナ（1824～84）は中流階級の家庭に生まれ育ったこともあってドイツ語を母語として育ち、後年になってからチェコ語を学んでいる。一方、アントニン・ドヴォルジャーク（1841～1904）の場合、小さな村で宿屋兼肉屋を営む家庭に生まれたのでチェコ語を母語として育ち、肉屋の資格を取るために学校でドイツ語も勉強していた。

アメリカ時代の代表作 ▶ ドヴォルジャークの存命中、ボヘミア王国は「オーストリア帝国」（1804～67）および「オーストリア=ハンガリー帝国」（1867～1918）に編入された状態だった。ハプスブルク家から独立できなかったにもかかわらず、チェコ文化を反映した音楽を生み出していた業績を評価され、アメリカ独自の音楽を書ける作曲家を育成しようとしていた富豪サーバー夫人はドヴォルジャークに目をつける。こうして彼はニューヨークの音楽院の院長に就任したのだった。教育活動の傍ら、黒人や先住民の文化と接して刺激を受けたことで、この交響曲に加え、弦楽四重奏曲第14番「アメリカ」、チェロ協奏曲など、新世界であるアメリカ滞在中に書かれた作品は傑作揃いとなった。

各楽章の特徴 ▶ **第1楽章**は、ドヴォルジャーク自身がアメリカへと向かい、ヨーロッパと異なる新世界の文化と出会っていくかのような音楽。形式はソナタ形式で、船旅を思わせる序奏ではじまり、勇ましい第1主題、抒情的な第2主題、明るくホッとする小結尾主題によって構成されていく。そして主題の一部は、他の楽章にも登場する。

第2楽章は、望郷の念を駆り立てる緩徐楽章。形式は三部形式で、中間部ではアメリカ先住民の英雄ハイアワサが、雪が降りしきるなか妻を埋葬する場面が描かれる。

第3楽章は、徐々に加速していく先住民たちの踊りを想像で描いたスケルツォ。形式は三部形式で、中間部では落ち着いて朗らかな情景に。

第4楽章は、集大成となるフィナーレ。形式は自由なソナタ形式で、威勢のよい第1主題、クラリネットではじまる柔らかな第2主題（小結尾の旋律は第1～2主題の変奏によって生み出される）に加え、展開部では第1～3楽章の主題も絡み合っていく。様々な文化の混じり合うアメリカを描いたかのような音楽だ。

［楽器編成］フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部。